Differential effects of ageing and BLS training experience on attitude towards basic life support

メタデータ	言語: eng
	出版者:
	公開日: 2017-10-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/45611

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

論文内容の要旨及び審査結果の要旨

受付番号　医博甲第2538号　氏名　江並　美紀

論文審査担当者　主査　多久和　陽　印

副査　谷口　巧　印

中村　裕之　印

学位請求論文

題　　名　受講者の受講経験と年齢が一次救命処置に対する態度に及ぼす影響

掲載雑誌名　Resuscitation　第82巻 第5号　577頁～583頁　平成23年5月掲載

院外心停止患者の蘇生と予後は救命の連鎖の最初の3つの輪が大きく関与する。1つ目の輪、早期通報の遅れは生存率を悪化させる。2つ目の輪のその場に居合わせた者の早期の心肺蘇生は生存率を高める。消防の通信司令員による口頭指導は、現場に居合わせた人の心肺蘇生実施率、および生存率を改善している。3つ目の輪であるＡＥＤも普及してきた。

日本では様々な機関で一次救命処置講習が行われており、心肺蘇生への意欲が年々高まってきている。しかし、院外心停止の多くは家庭で発生している。近年の急速な社会の高齢化に伴い、第一発見者が高齢者である確率が高くなってきた。高齢者ほど講習受講率は低い。

本研究は大規模アンケート調査に基づき、受講経験と年齢の一次救命処置に対する態度の差および態度に影響する因子の同定を行うことを目的とした。

石川県内の認定自動車教習所において運転免許取得時救命講習、安全講習の受講者を対象に、2007年5月から2009年5月までの期間に、救命の連鎖に係る4つのシナリオに対する態度および回答者背景に関するアンケート調査を講習受講前に実施、25,922のうち有効回答を若年者群、中年者群、高齢者群に分け分析した。

一次救命処置に対する態度では、自らの判断で心肺蘇生を開始する意欲は若年者で高く、高齢者で低かったが、救急口頭指導には応じるとする割合は高齢者でも70%近くであった。心肺蘇生や口頭指導下の胸骨圧迫、早期通報、ＡＥＤ使用に消極的な理由は、知識・判断力不足、未経験、手技への不安であった。多変量解析では、高齢者がすべてのシナリオでの消極的な態度に関連する因子であった。講習受講経験は早期通報に対する積極的態度に関連する因子ではなかった。女性はすべてのシナリオに関して消極的であった。

現在の救命講習は処置の実技に時間が費やされており、救命の連鎖の最初の輪「早期通報」が強調されていない。早期通報がなければ、救命の連鎖もつながらず有効な口頭指導を受けられない。さらに講習における想定は、複数の救助者が協力して救命処置を行うものである。救助者が1人の場面や高齢者、女性などを想定した講習を行う必要があると考える。高齢者は一次救命処置に対し非高齢者より消極的であるが、口頭指導には比較的積極的に従う。高齢者が心停止を判断し、早期に緊急通報ができるよう今後の蘇生ガイドラインの改定に期待する。

以上、本研究は一次救命処置講習受講経験と年齢の差が心肺蘇生に対する意欲とそれに影響する因子を詳細に分析しており、より有効な講習に対する蘇生ガイドラインの変更に寄与する研究であり、学位授与に値すると評価された。